札幌保健医療大学

２０２５年度　一般選抜入学試験前期Ｂ日程

国　　語

２０２５年２月５日(水)

１時限目　９：３０～１０：３０

注　意

１．この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。

２．解答時間は60分です。

３．解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。

４．問題冊子は１頁～12頁、解答用紙は１枚です。

５．解答はすべて解答用紙に記入してください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もうずいぶん前のことになるが、コンピューターを使い始めた頃、デスクトップ上にある[1]「ごみ箱」というやつが、どうにも不気味で仕方がなかった。書き損じの紙を丸めて捨てる感覚としては「屑籠（くずかご）」という言葉のほうが好きだが、別にごみ箱が嫌いなわけではない。以前は、原稿を丸めて捨ててから、「でもやっぱり」と思って籠から拾い上げることがあった。皺々（しわしわ）の紙をひろげてみて、もういちど読んだりする。コンピューターの「ごみ箱」では、そこにいったん捨てたら跡形もなく消えてしまい、二度と「ひろげる」ことができないのではないかと、怖れていたのだ。[A]杞憂にすぎないことは、教えてもらって知った。「ごみ箱」をオープンしてみると、捨てたファイルがちゃんと残っている。コンピューターでは「捨てる」のではなく、ごみ箱に「移動する」ということが分かった。それでも不信感が残る。たとえばデスクトップ上でCD-ROMのアイコンをごみ箱に捨てると、一瞬置いて、コンピューター本体からCD-ROMが出てくる。捨てたものが出てくるのだ。「捨てる」ということが何を意味するのかが、分からなくなってくる。

個人的な混乱は、コンピューター上で保存したり、捨てたりするのが、モノではなく、記憶データであるということに起因している。そこでは「捨てる」という述語は、日常的な意味での廃棄の動作とは異なり、実際には複数の異なる命令を実行するために使われる隠喩である。捨てたものが出てくるのは、実際には「捨てて」はいないからで、たとえばCD-ROMがどこかに消えてしまったら、それこそ驚きである。

もっとも人間の記憶にも、似たような問題がある。忘れるということは、記憶を捨てることなのかどうか。だとしたら、忘れていたことが、なぜある日突然出てきたりするのか。わたしたちが日常生活を送るうえで、どうして忘れるべきことを忘れて、覚えるべきことを覚えられるのか、記憶の選択性についても考えなければならない。起床からシュウシンまでの一日に起きたことのうち、忘れることのできている部分がどれほど大きいか、考えてみよう。それは記憶できないからという消極的な理由で「捨てられて」いるのか、それとも必要のない部分を選択し、積極的に「捨てている」のか。日常的な繰り返しの行動は、ふつう無意識的に行なわれていると考えられている。覚えていても仕方ないものは、覚えないのだ。これは考えてみると、[2]偉大な忘却の力である。たとえば今朝捨てたゴミ袋の内容などについて、わたしたちはそこに何が入っていたか覚えてはいないだろう。

捨てるものを覚えていても意味がないからか、それとも意味がないから忘れて、捨ててしまえるのか。どちらでもよさそうだが、もしかすると電子情報化時代において、これは本質的な問いかもしれない。扱わなければならない情報の量がこの調子で増えてゆくと、どの情報を捨てるかという問題は、少なくともどの情報を保存しておくべきかと同じくらい、いやそれ以上に深刻な問題になってくる。ゴミと記憶

に関しては、パリで開かれた、あるアーティストの展覧会を思い出す。

「アルマン」こと、フェルナンデス・アルマンの展覧会である。一九二八年生まれのフランスの彫刻家だが、同じニース生まれのイヴ・クラインとともに「ヌーボー・レアリスム」グループを創設したひとりで、特に「集積」というタイトルの彫刻で世界的に知られている。これは道具類や楽器から自動車まで、あらゆる工業製品を文字どおり「集積」して彫刻作品とするもので、有名なところでは自動車を何十台と積み上げてコンクリート詰めした巨大彫刻がある。アルマンが七〇歳の時に開かれたカイコ[b]展の会場では、ヴァイオリンからテニスシューズまで、さまざまなモノがキャンバスの上に見事に貼り付けられた「集積」の展示があった。ところが会場を歩いていると、面白いことに、それらの有名な作品よりも、別のところに人気が集まってることに気がついた。

展覧会自体は入り口に行列ができるほどなのだが、ほとんどの観客は会場に入って最初の作品、つまりもっとも初期の作品の前で立ち止まり、動こうとしないのである。人垣のあいだから覗(のぞ)いてみると、作品とおぼしきものは、アクリル製の円筒で、中にゴミのようなものが詰まっている。近づいてよく見ると、それはゴミのようなものではなく、正真ショウメイ[c]のゴミだった。タイトルを見れば身も蓋もなく『ゴミ』(poubel)であり、展示されていたアクリルの「ゴミ箱」は、すべて一九六〇年に制作されたものだった。

ゴミといっても、シンビ[d]的に選択された廃棄物ではない。一九六〇年のある日、アルマン宅のゴミ箱、それもどうやら浴室あたりに置かれていたとおぼしきゴミ箱の中身を、そっくりそのまま保存しただけのものである。これを通常の意味での「制作」と呼べるかどうかはさておき、人々が熱心に見つめているのは、アクリルのなかにぎっしりと詰まっているゴミの中身なのだ。剃刀(かみそり)の刃や化粧水の瓶に混じって髪の毛や、メモの切れ端や浴室で使われたと思われる、さまざまな商品の包装紙、そして底のほうに溜(た)まった塵(ちり)が見える。それらが、まるで地層をなすようにして、ぎっしりとアクリル容器を埋めているのだ。これを見るかぎり、六〇年代初めのフランスには、まだプラスチック製品がほとんどなかったようだ。時代の風景が、ゴミを通して一目リョウゼン[e]となる。ちなみにフランスはゴミの収集に関してはEU内でもかなりの「後進国」で、分別ゴミのシステムはいまだに確立されていない。

などということを美術展で考えるのも不思議なものだが、それにしてもただのゴミに人垣ができるのは、たとえば石鹸(せっけん)の包装紙を指差しながら、「見覚えがある」とか「わたしも使っていた」とか言いながら笑っている、作家と同じくらいの年齢に達している観客たちのせいなのだ。「ゴミ」の周囲には、一種のコウヨウ[f]した空気が漂っている。「アルマンのゴミ」だけでなく、「イヴ・クラインのゴミ」といった友人たちのゴミもあって、それはそれで別の興味をそそられるわけだが、ともかく作品の鑑賞ではなく、古いゴミを見ながら、一種の「プレイバック」を楽しんでいるのである。普通だったら顔をしかめてもおかしくないような、他人の浴室の廃棄物に、妙なノスタルジーを感

じているらしいのだ。

[4] この〝ゴミの缶詰〟はアルマンのもっとも初期の作品であると同時に、もっともラディカルな「ヌーボー・レアリスム」作品である。ただのゴミも三〇年間保存しておけば「作品」になるという意味で、ラディカルなのではない。そのゴミが書斎やアトリエから出る紙屑（かみくず）の類ではなく、わたしたち誰もが毎日生産し捨てている、何の個性もないはずのゴミであるという点が重要なのだ。誰もが「無意識的」に捨て、忘れてしまうしかないようなモノが、そっくりそのまま残されている。ところがそれが三〇年後になって、これだけの視線を集めるほど面白いというのは、どういうことなのだろう。一種のタイムカプセルの面白さだろうか。

いま仮に、アルマンの真似（まね）をしてみようと決めて、自宅のゴミ箱を覗きにいったとする。たいていの人は、そこで選択を始めるに違いない。三〇年後にとっておいたら面白いと思うものや、逆にあまりに意味がないからとっておこうとか、いくつかの基準を設ける。タイムカプセルは、このように、未来に先回りして現在を選別するという、暗黙の作業を前提としている。

アルマンは、そうではない。もし彼がゴミを選択的に保存していたら、きっとこうはならなかっただろう。どれが残すに値するかをまったく考慮せずに、ある日浴室のゴミ箱をそっくりそのまま封印したからこそ、わたしたちはそこにまるで考古学的発掘の現場を見るような、軽い興奮を覚えたのではないだろうか。そこに皮膚感覚をくすぐる何かが含まれていることは確かである。髪の毛や化粧水の瓶が、わたしたちの記憶のもっとも深いところにある触覚的な部分や生理的な部分に働きかけるのかもしれない。実際、美術館の白い壁のなか、スポットライトをあてられたアクリル製のゴミ箱は、どこか妖しく、わたしたちの視線をとらえて離さない。その時代に見た映画のワンシーンを語る観客もいる。もっとも無意味な不必要なモノが、これほど記憶を刺激するのは、いったいどうしたことなのか。その情景は、美術展というよりは、遺跡を訪れた観光客に近い。いや、これは[5]恣意的な選択が存在しないという意味で、まさしく考古学的な「遺跡」ではないか。わたしたち観客は、三〇年前の個人的な「遺跡」を見ていたのである。

（港　千尋『第三の眼』による）

問一　二重傍線部a～fと同じ漢字を、次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

a　シュウシン　①優シュウな人材　②演シュウ問題　③公シュウの面前　④シュウ学児童　⑤仕事の報シュウ）

b　カイコ　①コ張した表現　②歓コの声　③お店のコ客　④職員の解コ　⑤開かれた門コ）

c　ショウメイ　①座右のメイ　②舞踏のメイ家　③人生のメイ暗　④数奇な運メイ　⑤汽笛の吹メイ）

d　シンビ　①首ビ一貫　②軽ビな被害　③白ビの試合　④家具の完ビ　⑤有終のビ）

e　リョウゼン　①職場の同リョウ　②明リョウな態度　③病気の治リョウ　④科学のリョウ域　⑤不当なリョウ刑）

f　コウヨウ　①重ヨウな案件　②ヨウ動作戦　③君主のヨウ立　④抑ヨウのある言葉　⑤許ヨウの範囲）

問二　傍線部1の理由の説明として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

①「ごみ箱」という語の持つ語感が、「屑籠」という語のそれと比べるとなじみがないものだったから。

②「ごみ箱」を開いてみると、捨てたはずのものが残っていることに感動を覚えたから。

③「ごみ箱」に移動することを「捨てる」と表現することは、言葉の乱用と思われたから。

④「捨てる」のが手に取ることができる「モノ」ではなく、実体のない「記憶」データであることに混乱したから。

⑤コンピューターの「ごみ箱」の場合は、いったん捨ててしまったものを、もう一度読むことができないと思っていたから。

問三　波線部A、Bの意味として最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。

A「杞憂」

①取るに足りないことに悩むこと　②心配しないでいいことを心配すること　③ぐずぐずしてなかなか決断しないこと

④最悪の事態を想定すること　⑤早合点して間違えること

B「身も蓋もなく」

① 他人のことが自分のことのように感じられて　② 隠していたことが世間に知れ渡り　③ 表現が露骨すぎて味わいがなく

④ 自分の都合の良い行動ばかりしていて　⑤ 外観は立派だが中身が貧弱であり

問四　傍線部2「偉大な忘却の力」という表現を通して、作者はどういうことを言おうとしていると考えられるか。最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

① 人間の記憶力にも限界があるので、すべてを記憶することはできないということ。

② 記憶すべき事柄と忘却してもよい事柄とを選別する基準は人によって異なっているということ。

③ 人間は現在の関心事とかかわり合うものしか記憶せず、他は忘れてしまうものだということ。

④ 人間は毎日取得する情報の大半を占める不要な情報を忘れられるからこそ、日常の生活が可能になるということ。

⑤ 人間が意図的に忘却してしまうものよりもはるかに大量のものを無意識のうちに忘却しているということ。

問五　傍線部3とあるが、どういうことを「不思議なものだ」と言っているのか。その説明として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

① 美術展で、あらかじめアクリルの円筒に詰められた「ゴミ」と題された作品が芸術作品か否かを考えること。

② 美術展で、アクリルの円筒に詰められた「ゴミ」の中身は本当にゴミなのかどうかを考えること。

③ 美術展で、美術とは直接関係ない過去や現在のフランスの生活事情についてあれこれ考えること。

④ 本来ならば美術展に展示すべきでない「作品」が出展されているにもかかわらず、その「作品」を芸術品だと考えること。

⑤ 日常の場から遊離している美術展には何の疑問も抱かないのに、日常をそのまま反映している作品にその是非を考えること。

問六　傍線部4とあるが、「この〝ゴミの缶詰〟」のどういう点が「ラディカルな『ヌーボー・レアリスム』作品」なのか。その説明として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

① わたしたちが日常ゴミとして無意識に捨てて忘れてしまっている「モノ」を、そのままの分量とかたちで芸術作品として展示

することにより、人に「モノ」を大切にすることの重要性を訴えている点。

② 過去のある日に日常生活から出た何の変哲もないゴミを、どれが残しておくに値するかということをまったく考慮にも入れずに、そっくりそのまま保存して、それを作品として人に見せている点。

③ 普通であれば誰も気にもとめず、忘れられてしまう何の個性もないゴミに焦点をあて、それを作品として残して見せることで、見る者の皮膚感覚や触覚的な部分、生理的な部分に効果的に働きかけようとしている点。

④ わたしたちが毎日生産しては捨てている廃棄物をそのまま作品として人に見せることで、何の特徴もないただの廃棄物も、三〇年間保存しておけば見せ方次第で美しいものに変貌するのだということを証明した点。

⑤ 他人のプライベートな生活を知りたいという観客の好奇心を喚起するために、書斎やアトリエという気取った場所から出る紙屑の類ではなく、過去の自分の浴室という日常生活の廃棄物をそのまま提示している点。

問七　傍線部5とあるが、タイムカプセルにおいてはどのような『恣意的な選択』が行われるか。三〇字以内で説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校二年生の美緒（みお）は学校に行けなくなり、祖父の住む盛岡に来ていた。毛織物の工房を営む祖父の元で美緒は羊毛を紡いで手織りの毛織物を仕立てる作業を学ぶことになったが、年老いた祖父はこれまで趣味で集めてきたものを整理し始めていた。

鉱物に本、絨毯（じゅうたん）や織物。他にも祖父が集めているものはたくさんある。染め場の奥にはエアコンで常に温度と湿度の管理をしているコレクション用の部屋があるほどだ。

「どうしてスプーンを集めたの？」

「口当たりの良さをa<u>ツイキュウ</u>したかったのと、あとはバランスだな。良い職人が削ったさじは軽くて美しい。手に持ったときのバランスが気持ちいいんだ。そのさじで食事をすると軽やかでな。天上の食べものを口にしている気分になる。[1]同じことは私たちの仕事にも言える」

「スプーンと布って、全然別物っぽく思えるけど……」

祖父が手を止めると、奥の部屋に歩いていった。すぐに戻ってくると、手には紺色のジャケットを抱えていた。生地はホーム（注1）スパンだ。

「おじいちゃんのジャケット？」

「そうだ。お祖母ちゃんが織ったものだ。持ってごらん」

渡されたジャケットは、見た目よりうんと軽く感じた。

「あれ？　軽いね」

「それでもダウンジャケットにくらべるとb<u>ジャッカン</u>重いがな」

ジャケットを羽織ってみるようにと祖父がすすめた。

袖に腕を通したとたん、「あれ？」と再び声が出た。手で感じた重量が身体に伝わってこない。肩にも背中にも重みがかからず、着心地がたいそう軽やかだ。それなのに服に守られている安心感がある。

「手で持ったときより、うんと軽い」

「手紡ぎ、手織りの糸は空気をたくさんはらむから軽くて温かい。身体に触れる布の感触が柔らかいから、着心地が軽快になる。さじにかぎらず、良い職人の仕事は調和と均衡が取れていて心地よいんだ。音楽で言えば」

「ハーモニー？　もしかして」

「そうだ、よくわかったな」
「私、中学からずっと合唱部に入ってたの」
祖父にジャケットを返すと、慈しむようにして大きな手が生地を撫でた。
「美緒は音楽が好きなんだな」
あらためて考えると、合唱はそれほど好きでもなかった。
熱心に部に勧誘されたことが嬉しかった。合唱部はみんな仲が良さそうに見えたから、その輪に入っていると安心できただけだ。
「部活、そんなに好きじゃなかったかも。[2]なんか……私って本当に駄目だな」
ジャケットを傍らに置くと、祖父がスプーンの梱包作業に戻った。
「この間、汚毛(注2)を洗っただろう？　どうだった？　ずいぶんフンをいやがっていたが」
「臭いと思ったけど、洗い上がりを見たら気分が上がった。真っ白でフカフカしてて。いいかも、って思った。汚毛、好きかも」
そうだろう、と祖父が面白そうに言った。
「美緒も似たようなものだ。自分の性分について考えるのは良いことだが、悪いことばかりを見るのは、汚毛のフンばかり見るのと同じことだ」
祖父が何を言い出したのかわからず、美緒は作業の手を止める。赤い漆塗りのスプーンを取り、祖父が軽く振る。
「学校に行こうとすると腹を壊す。それほどの繊細さがある。良いも悪いもない。駄目でもない。そういう性分が自分のなかにある。ただ、それだけだ。それが許せないと責めるより、一度、丁寧に自分の全体を洗ってみて、その性分を活かす方向を考えたらどうだ？」
「活かすって？　どういうこと？　そんなのできるわけないよ」
「そうだろうか？　繊細な性分は、人の気持ちのあやをすくいとれる。ものごとを注意深く見られるし、集中すれば思わぬ力をハッキする[d]こともある。へこみとは、逆から見れば突出した場所だ。悪い所ばかり見ていないで、自分の良い点も探してみたらどうだ？」
「ない。そんなの」
「即答だな」
祖父がスプーンに目を落とした。
「だって、ないから。自分のことだから、よくわかってる」

それは本当か、と祖父が声を強めた。
「本当に自分のことを知っているか？　何が好きだ？　どんな色、どんな感触、どんな味や音、香りが好きだ。何をするとお前の心は喜ぶ？　心の底からわくわくするものは何だ」
「待って。そんなの急にいっぱい聞かれても」
「ほら、何も知らない。いやなところなら、いくらでもあげられるのに」
からかうような祖父の口調に、美緒は顔をしかめる。
「そんなしかめ面をしないで、自分はどんな『好き』でできているのか探して、身体の中も外もそれで満たしてみろ」
「好きなことばっかりしていたら駄目にならない？　苦手なことは鍛えてコクフクしないと……」[e]
「なら聞くが。責めてばかりで向上したのか？　鍛えたつもりが壊れてしまった。それがお前の腹じゃないのか。大事なもののための我慢は自分を磨く。ただ、つらいだけの我慢は命が削られていくだけだ」
祖父がテーブルに並べたスプーンを指差した。
「手始めに、気に入ったさじがあったら、それで食事をしてみろ。良いさじで食物を口に運ぶ感触をとことん味わってごらん」[3]
「えっ、でも……」
戸惑いながらも梱包していないスプーンと、コレクションが納まった箱を美緒は一つずつ見る。祖父が集めたものは、どれも色や形が美しい。そしておそらく外見のほかにも祖父の心をとらえた何かがある——。しだいに興味がわいてきて、次々とスプーンが入った箱を開けて見る。
木材、金属、動物の角。さまざまな材質のスプーンを持ったあと、最後に残った箱を開けた。
赤や黒、赤紫色に塗られた木製のスプーンが出てきた。
無地もあるが、金箔などで模様が描かれたものや、虹色に輝く装飾が施されているものもある。[f]
一本、一本見ていくなかで、シンプルな黒塗りのスプーンに心惹かれた。手にすると、スプーンの先から柄に向かって、真珠色の光が走った。
「おじいちゃん、これはうるし？」
祖父はうなずいた。

4 「これがいい、これが好き。おじいちゃん、このスプーンをください」

「美緒はこれが好きか。どうしてこれを選んだ？」

「直感？　何かいい感じ」

5 祖父の目がやさしげにゆるんだ。

注1　ホームスパン　手で紡いだ太めの毛糸を使って手織りした織物。

注2　汚毛　羊から刈り取ったままの状態の毛

（伊吹有喜『雲を紡ぐ』による）

問一　二重傍線部a～fについて、カタカナを漢字に直し、漢字には読みを平仮名で書きなさい。

a　ツイキュウ　　b　ジャッカン　　c　傍ら

d　ハッキ　　e　コクフク　　f　施されて

問二　傍線部1「同じこと」とはどういうことか。三〇字以内で説明しなさい。

問三　傍線部2「なんか……私って本当に駄目だな」とあるが、このときの美緒の心情として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

① 中学からずっと合唱部にいたのに、合唱を好きにもならず、友達もできなかったので、時間を無駄にしたと自己嫌悪に陥っている。

② 祖父に言われるまで、合唱部の本当の良さについて考えたこともなかったことに気づき、自分の迂闊さを嘆いている。

③ 学校へ行けなくなったのは、好きではない部活を続けていたからということがわかり、退部していればよかったと後悔している。

④ 合唱部の仲間といると安心すると思うだけで、部活の仲間のように真剣に音楽に打ち込んでこなかった自分を責めている。

⑤ 合唱が好きというわけでもなく、熱心に勧誘されたことが嬉しくて入部し、ただ部活を続けていた自分を情けなく思っている。

問四　傍線部3「手始めに、気に入ったさじがあったら、それで食事をしてみろ」とあるが、なぜ祖父はこのようなことを言ったのか。最も適当なものを次から選んで番号で答えなさい。

① 何に対しても否定的に捉えてしまう美緒に、食事の楽しさを体験することで気分転換して欲しかったから。

② 考えるだけで何もしようとしない美緒に、身近な何かを変えることで、行動するきっかけを与えたいから。

③ 自分の好きなさじで食べ物を口にする喜びを知ることで、自分を「好き」で満たす喜びを実感させたいから。

④ 祖父が集めたさじに触れさせることで、良いものに触れる感触を味わい、さじを集めた理由を知ってほしいから。

⑤ 良いさじで食事をすることで、良いものを作る素晴らしさを理解させ、良いさじ職人に育てたいから。

問五　傍線部４「これがいい、これが好き。おじいちゃん、このスプーンをください」とあるが、このときの美緒の心情として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

① 祖父と同じようにうるしのスプーンに心惹かれたことで、祖父と共通する感覚があるとわかって嬉しくなっている。
② 今までは何が好きか考えたことがなかったのに、「これが好き」とはっきり言えるものを見つけたことを喜んでいる。
③ ものごとを注意深く見られるという自分の長所を活かして良いスプーンを選ぶことができ、自信をつけている。
④ ものの価値についてわからないままに、直感で良いスプーンを見抜くことができて得意になっている。
⑤ 祖父の集めたスプーンを見ることで、祖父の好みや物の選び方を知り、祖父の人柄に惹かれ始めている。

問六　傍線部５「祖父の目がやさしげにゆるんだ」のはなぜか、その理由を五〇字以内で説明しなさい。

問七　次の会話文は本文の表現の特徴について生徒が話し合っている場面である。本文の特徴と一致する発言をしている生徒を、次から二人選んで記号で答えなさい。

生徒Ａ　「えっ、でも……」のように、美緒の発言には「……」が多く、美緒の戸惑いや自信のなさを示しているね。

生徒Ｂ　そうではなくて、祖父に自分を理解してもらうためにうまく説明しようとして、逆に言葉に詰まっている様子を示していると思うよ。

生徒Ｃ　「天上の食べものを口にしている」のように、祖父の言葉が難しいので美緒が困っている場面が多いよね。

生徒Ｄ　ほぼ二人の会話のやり取りで表現されているけど、祖父と言葉を交わすうちに美緒が少しずつ変化していることが読み取れるね。

生徒Ｅ　そうだね。でも、それだけじゃなくて、祖父の畳みかけるような話し方からは、孫を救いたい必死さと共に厳しさが伝わってくるね。

生徒Ｆ　「してみろ」のように、祖父の言葉は命令形が多くて、甘やかすのではなく師として美緒を自分に従わせたいという気持ちがわかるよ。